

長崎の教会群とキリスト教関連遺産 — 長崎から世界遺産を！ —

第6回目



原城跡（南島原市（航空写真））

長崎県世界遺産登録推進室



■はじめに

世界遺産候補「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、伝来と繁栄、激しい弾圧と250年もの潜伏、そして世界に類を見ない独自の「キリスト教の伝播と浸透のプロセス」を示しています。

今号では、キリシタン文化が繁栄した島原・天草の領民が、島原半島の原城に立てこもり、幕府が総攻撃を行った「島原・天草一揆」についてご紹介します。

■原 城

原城（南島原市、構成資産）は、キリシタン大名・有馬晴信ありまはるのぶが日野江城（南島原市、構成資産）に加え、朝鮮出兵からの帰国直後に新たな城として建設に着手したものです。1604年のイエズス会年報には、この原城について、「有馬殿は、準管区長に依頼して、彼等の主がこれらの屋敷を守護し、またその新城を神の保護のもとに置くようにそれらの屋敷でミサを立て、これらを祝別してくれるようにと懇願した。」との記載があります。このように、原城は宣教師によって祝別され、建設当初からキリスト教と非常に関わりがある城でした。

■蜂起の誓い

有明海に突き出た断崖の上から、すぐ目の前に天草を一望できる原城跡。ここは、圧政に苦しめられた島原と天草の領民がともに蜂起ほうきし、約3万7,000人もいわれる人々が全滅した「島原・天草一揆」の舞台として知られています。

もともと、島原半島は晴信の所領で、口之津くちのつ、加津佐かづさ、有馬を中心にキリスト教が栄えたところでした。1637年、彼らは、同じく圧政に



わずか16、17歳で一揆軍を率いたといわれている天草四郎（「原城跡」の天草四郎像、南島原市）

苦しむ天草の領民と、双方の間の海に浮かぶ湯島で談合し、蜂起することを誓い合います。このとき、総大将となったのが、天草四郎（増田四郎時貞）でした。

■キリシタン信仰を支えていたもの



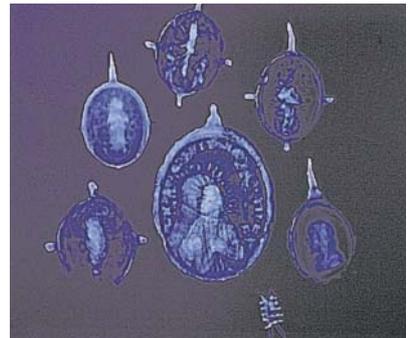
原城攻囲陣営並城中図
(松浦史料博物館蔵)

キリシタン大名、有馬晴信が30年以上治めた島原半島には、キリシタンの強い信仰の土台が形成されていました。村々の庄屋や乙名（庄屋の下で小さな単位で村民をまとめる代表者）の多くはキリシタンでした。厳しい取締りの中にあっても、有馬氏の転封で農民になった元武士とコンフラリア（キリシタンの信仰共同組織）の指導で、キリシタンは結束し、信仰を固く守っていました。

■苛酷をきわめた政治に耐えかねた蜂起と原城への籠城

一揆の原因は、島原藩主 松倉氏の苛政への反発が原因といわれています。森岳城（現在の島原城）築城などのために重税を課し、連年の凶作であったにもかかわらず、禁教に名をかりて、領民から強引に年貢を取り立てていたのです。

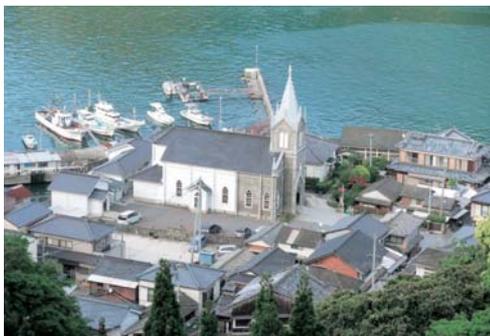
1637年12月、一揆軍は、最初に森岳城に攻め入りましたが落とせず、翌年、廃城となっていた原城に立てこもります。そして信仰の結末に加え、農民となっていた元武士たちの戦闘技術もあり、幕府軍の上使・板倉重昌の鎮圧をはね返していきました。しかし、次に派遣された老中松平信綱は兵糧攻めを決行しました。



青銅製のメダイや鉛の弾を溶かして造った十字架など原城跡からは、多くのキリシタンの遺物が出土している。

■一揆軍の陥落

88日間の籠城の末、1638年4月12日、ついに一揆軍は崩れ、老若男女の区別無く皆殺しにされる凄惨な結末を迎えました。総大将の天草四郎の首は長崎でもさらされたといわれています。原城は徹底的に破却され、一揆軍の遺体が埋められました。総攻撃から3日後には城の取り壊しが命じられるとともに、山狩りが始まり、徹底したキリシタン搜索がなされたと伝わっています。



「島原・天草一揆」以降、長崎奉行所の支配を受けた天草。庄屋役宅で絵踏みが行われましたが、崎津の人々は、信仰を継続しました。（「天草の崎津集落」（天草市、構成資産）

■キリシタン取締りの強化

この乱の後、幕府はキリシタンの取締りを一層強化します。「絵踏み」などに加え、キリシタンを密告した者にほうびを与える「キリシタン訴人褒賞制度」などを全国に導入しました。さらに、キリスト教と関係の深いポルトガルとの交易を断絶し、全国的な沿岸警備体制が次第に整備される中で、鎖国は完成しました。

島原・天草一揆は、幕府の権威を高め、鎖国体制の確立とキリシタンの取締りを強化させる大きなきっかけとなったのです。